

研究推進戦略センターの活動

地球研創設以来の研究推進センターは、2007(平成19)年10月1日から新たに研究推進戦略センター(以下、戦略センター)として発足しました。

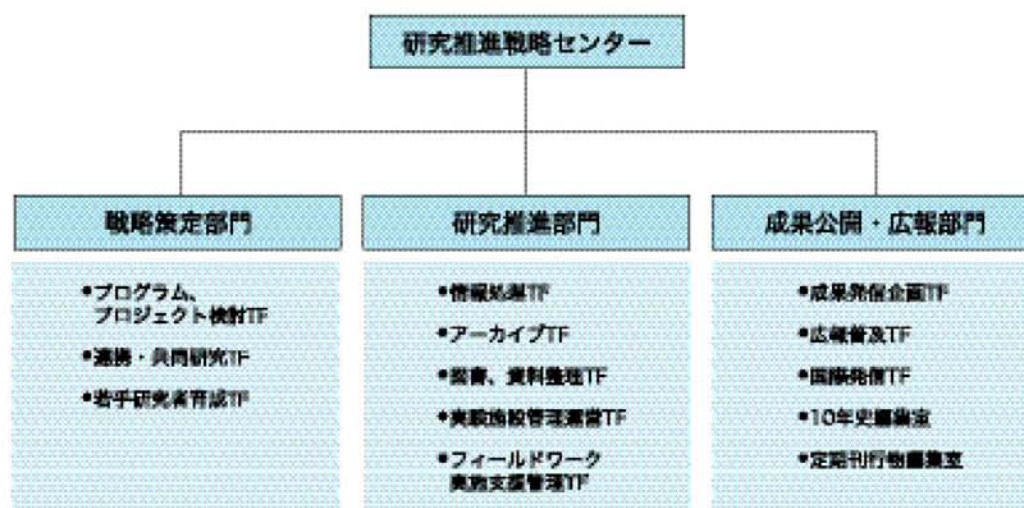
戦略センターは、地球研のプログラム方式にもとづく研究プロジェクトを支援し、得られた成果を集積・発信し、さらに新たな研究を創出するための戦略を策定する重要な機能を担っています。その機能を実現するために、戦略センターに機動的な3つの部門を配置しました。

それらは、(1)地球環境学の構築、研究構想・将来計画の策定、連携研究の推進、大学院開設を含めた若手研究者の育成などの基盤整備を行う**戦略策定部門**、(2)地球環境学の情報処理、アーカイブスの整備と維持管理、図書・資料整備、実験施設の管理運営、野外研究の支援と管理を実施する**研究推進部門**、(3)成果発信の方針と国内への発信企画・実施、国外への発信企画・実施を担当する**成果公開・広報部門**です。

それぞれの部門に専任の部門長を置き、さらに部門ごとに実働グループとなるいくつかのタスクフォース(TF)や編集室が配置されています。タスクフォースの作業は、戦略センターの専任スタッフ以外に、研究部と管理部の連携と協力のもとに行うことになっており、その体制は本年4月1日より本格的に始動しました。

戦略センターは、国内外の研究機関・組織との連携を進めるうえで中核的な役割を果たすことを目指しており、国内では特に共同利用を推進するために、情報ネットワークの拠点となる事業を立ち上げ、全国の研究機関等との連携による研究推進を目指します。

戦略センターは、地球研全体としての研究を推進するためのセンターであり、領域プログラム・研究プロジェクトとともに地球研を支える車の両輪の働きを担うこととなります。



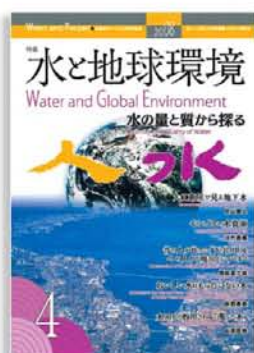
研究推進戦略センターの組織と業務

人間文化研究機構のなかの地球研

地球研は、国立大学法人法に基づき、2004(平成16)年4月1日に設置された大学共同利用機関法人「人間文化研究機構」(構成機関は、地球研のほか、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館)の一員となりました。地球研としての独自の研究を推進する一方、人間文化研究機構の進める連携研究、資源共有化推進事業、地域研究推進事業等の新規事業に加えて、公開講演会・シンポジウムなど、同機構主催の諸事業や共同利用活動に積極的に関わっています。とくに、連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」については、その一翼を担う「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」を地球研が中核機関として進めています。また、人間文化研究機構による地域研究推進事業「現代中国地域研究」の一環として、2007年8月には地球研に「中国環境問題研究拠点」が設置されました。

人文社会系の研究機関を中心とする人間文化研究機構のなかで、自然系のアプローチを含む統合的な地球環境学の研究を人間文化の問題として行なう機関として、地球研が今後、機構内の他機関や全国の大学・研究機関との連携を進めていく大きな可能性を秘めています。

● 連携研究「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」



人間文化研究機構の連携研究「人と水」の研究連絡誌「人と水」。これまで0号～4号を発刊。テーマ別の特集を企画し研究成果の発信と共有化を進めている

この研究は、人間文化研究機構の連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」のなかで「人と水」をテーマとし、水の恩恵と災禍を歴史的に経験してきたモンスーン気候下の湿潤アジア地域をとりあげています。人類諸集団と水との関わりから生み出されてきた多様な歴史・民族・民俗・生態・思想についての統合的な研究を実施し、日本を含むユーラシア世界における「人と水」の関わりについての人類史的意義を明らかにすることを研究の大きな目的としています。

この連携研究には、地球研のほか人間文化研究機構の他の機関の研究教育職員や、全国の国公私立大学の教員が共同研究者として参加しています。

2004(平成16)年4月に開始し、共同研究会、連携塾(一般市民を対象とした半年で6回連続の公開講義)およびシンポジウムを定期的に開催しています。

● 中国環境問題研究拠点



中国環境問題研究拠点のニュースレター「天地人」。これまで0号～1号を発刊

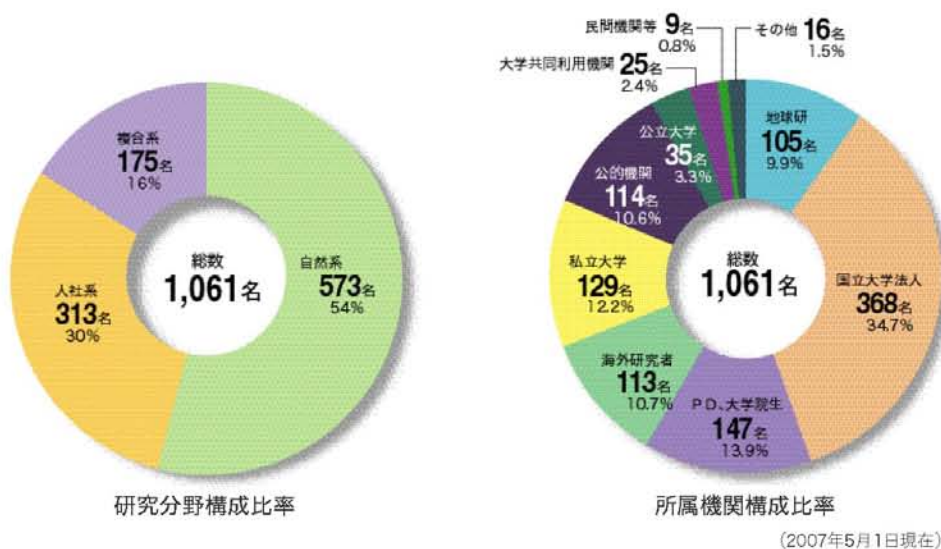
この研究拠点では、地球研の研究プロジェクトの成果を土台に「開発による文化・社会および環境の変容」という視点で、中国の環境問題を自然・人間文化の両面にわたって相対的に捉えようとしています。各種研究会やフォーラム、国際シンポジウムの開催及びニュースレター『天地人』の発行を通して、中国各地における経済開発にともなう環境問題の実態と対策に関わる研究成果を発信しています。その一環として2007年10月に京都大学拠点及び人間文化研究機構の「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」と連携し、持続可能な「つぎなる社会システム」の構築に向けて「水をめぐる麗江古城の環境思想と環境保全」をテーマに第1回中国環境問題シンポジウムを開催しました。2007年11月には河海大学や南京大学と連携し、「社会開発と水資源・水環境問題」をテーマに南京で第2回シンポジウムを主催しました。

<<http://www.chikyuu.ac.jp/rihn-china/>>

共同研究

● 共同研究者の構成比率

地球研は大学共同利用機関として、地球環境学に関わる多くの分野・領域を横断する総合的な共同研究を推進するため、我が国の大学をはじめ、各省庁、地方公共団体（公的機関）や民間の研究機関、さらには海外の研究機関と密接な連携を図っています。



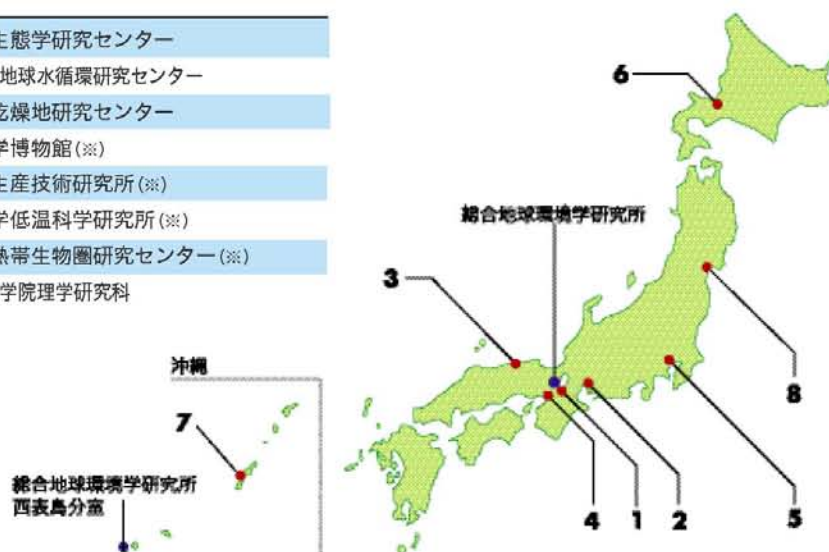
● 国内の連携研究機関

地球研では、以下に示す全国8つの大学研究機関等と連携を図って研究を進めてきました。これら8つの研究機関からは、協定に基づき複数の教員が期間を定めて地球研の教育研究職員として研究をしています。

ただし(※)は流動定数による連携研究機関である。

連携研究機関

1. 京大大学生態学研究センター
2. 名古屋大学地球水循環研究センター
3. 鳥取大学乾燥地研究センター
4. 国立民族学博物館(※)
5. 東京大学生産技術研究所(※)
6. 北海道大学低温科学研究所(※)
7. 琉球大学熱帯生物圏研究センター(※)
8. 東北大学大学院理学研究科



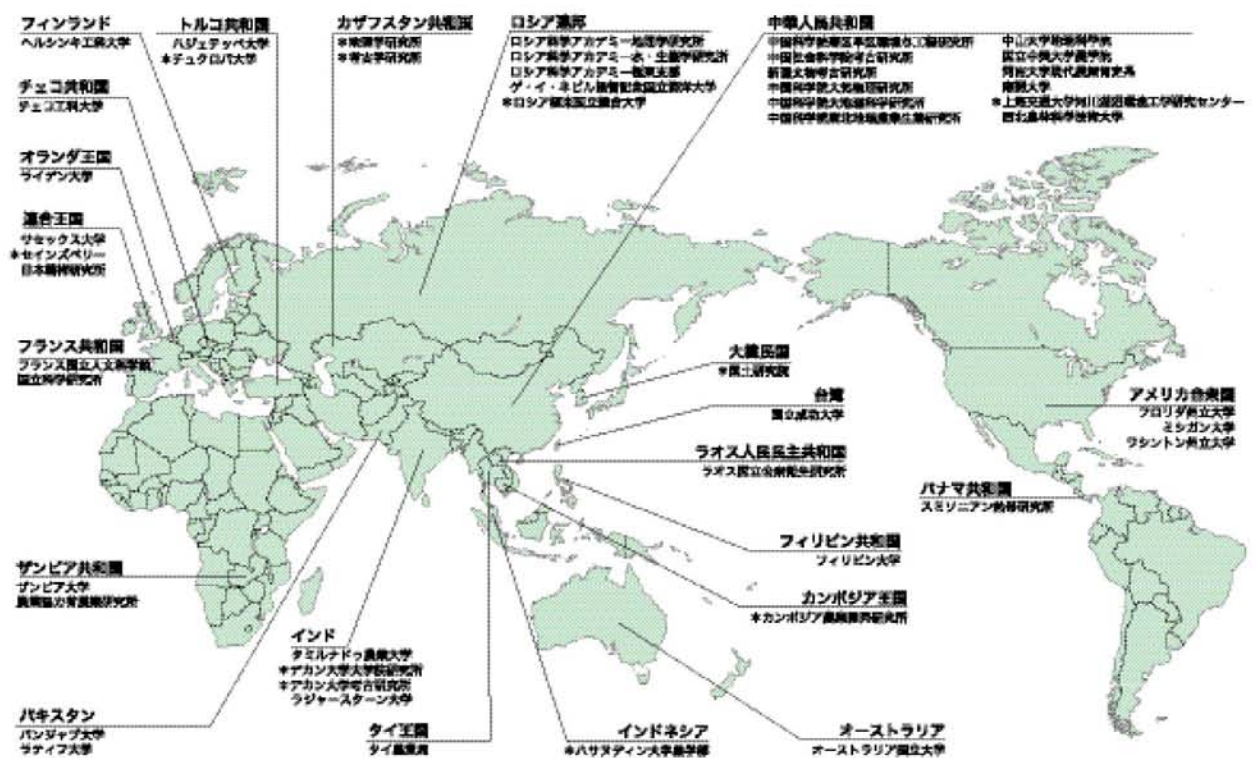
● 海外の連携研究機関

地球研では、世界各国の研究機関・研究所などとの間で積極的に覚書及び研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などをすすめています。また、海外の研究者との連携をさらに密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招へいしています。

なお、2007年度は、カンボジア農業開発研究所など11の海外の研究機関等との覚書又は研究協力協定を締結しました。

覚書及び研究協力協定の締結 (2008年4月1日現在)

*は2007年度に締結した覚書



カンボジア農業開発研究所 (CARDI) との覚書締結 (2007年6月)



ロシア極東国立総合大学との覚書締結 (2007年7月)

研究成果の発信

● 国際シンポジウム

地球研では、その年度に終了する研究プロジェクトを中心に毎年1回、国内外の学界を対象に国際シンポジウムを行っています。

第1回国際シンポジウムは、2006年11月に「水と人間生活」をテーマに開催しました。第2回国際シンポジウムは、2007年10月に「緑のアジア—その過去、現在、未来」と題して、北アジアから東南アジアにかけて連なる森林帯（グリーンベルト）の生物多様性と、それを支える文化の多様性、さらにグリーンベルトに大きな影響を及ぼすと考えられる中国やモンゴルの乾燥地帯の環境政策について、発表と討論を行いました。2008年10月には「島嶼の固有性と脆弱性」をテーマにして、第3回国際シンポジウムを開催する予定です。

● フォーラム

地球研では、毎年1回、市民を対象としたシンポジウム形式の「地球研フォーラム」を開催しています。このフォーラムでは、地球研の理念、研究成果に基づき将来を見越した具体的な問題提起を行うことにより、ひとりひとりの生活に大きく関わる環境問題の現状を正しく理解してもらい、一緒に解決の糸口を探ることを目的としています。これまで、2002～2007年度に計6回のフォーラムを開催して報告書を刊行してきましたが、2004年からは『地球研叢書』として、フォーラムの内容に加筆した単行本を刊行しています。地球研叢書は読みやすい内容で市民のみなさんに地球環境問題を理解していただくことを目的として編集しており、多くの読者をえています（地球研叢書については64ページ参照）。



2008年度は「越境する環境問題」を取り上げ、国境を超えて影響を及ぼし、その解決には多国間の利害調整が必要とされる大気や水の汚染など、さまざまな環境問題を取りあげて討議する予定です。

回数	タイトル・日時（場所 国立京都国際会館）	
第1回	地球環境学の課題—統合理解への道	2002年5月17日
第2回	地球温暖化—自然と文化	2003年6月13日
第3回	もし生き物が減っていくと—生物多様性をどう考える—	2004年7月10日
第4回	断ち切られる水	2005年7月9日
第5回	森は誰のものか？	2006年7月8日
第6回	地球環境問題としての「食」	2007年7月7日
第7回	越境する環境問題	2008年7月5日

● セミナー

地球研が一般市民を対象とするセミナーには、ほぼ毎月、地元京都市で定例的に行う「地球研市民セミナー」と、年に1回程度、地元京都以外の地域に出掛けて行う「地球研地域セミナー」があります。



一般市民を対象とする「地球研市民セミナー」会場風景



第3回地球研地域セミナー「伊豆の花と海。——伊東から考える地球環境——」の会場風景

■ 地球研市民セミナー

2004年11月の第1回から2008年3月までのべ24回開催してきました。地球環境問題を具体例に即して分かりやすく解説いたします。毎回、会場から多くの質問が寄せられています。

回数	テーマ	日時	講演者
第1回	シルクロード地域のロマンと現実	2004年11月5日	中尾正義 (地球研教授)
第2回	琵琶湖の水環境を守るには	2004年12月3日	谷内茂雄 (地球研助教授) 中野孝教 (地球研教授)
第3回	亜熱帯の島・西表の自然と暮らし	2005年2月4日	高相徳志郎 (地球研教授) 古見代志人 (祖納公民館長) 他
第4回	21世紀をむかえた世界の水問題	2005年3月4日	鼎信次郎 (地球研助教授)
第5回	地球温暖化、ホント？ ウソ？	2005年4月1日	早坂忠裕 (地球研教授)
第6回	地球温暖化と地域の暮らし・環境～トルコの水と農から	2005年6月3日	渡邊紹裕 (地球研教授)
第7回	鴨川と黄河～その恵みと災い	2005年9月2日	福高義宏 (地球研教授)
第8回	東南アジアの魚と食	2005年10月7日	秋道智彌 (地球研教授)
第9回	生き物の豊かな森は持続的な社会に必要なである	2005年12月2日	中静 透 (地球研教授)
第10回	環境の物語り論～環境の質と環境意識	2006年2月3日	吉岡崇仁 (地球研助教授)
第11回	アムール川・オホーツク海・知床～巨大魚付林という考え	2006年3月3日	白岩孝行 (地球研助教授)
第12回	モンスーンアジアからシルクロードへ～ユーラシア環境史事始	2006年4月14日	佐藤洋一郎 (地球研教授)
第13回	どうなる日本の自然？ どうする日本の国土？	2006年6月9日	湯本貴和 (地球研教授)
第14回	なゼインダス文明は崩壊したのか	2006年9月22日	長田俊樹 (地球研教授)
第15回	大地の下の「地球環境問題」	2006年10月20日	谷口真人 (地球研助教授)
第16回	景観は生きている	2006年12月1日	内山純蔵 (地球研助教授)
第17回	病気もいろいろ～人の医者、環境の医者	2007年3月9日	川端善一郎 (地球研教授) 奥宮清人 (地球研助教授)
第18回	シルクロード～人と自然のせめぎあい	2007年4月20日	窪田順平 (地球研准教授)
第19回	途上国農村のレジリエンスを考える	2007年5月25日	梅津千恵子 (地球研准教授)
第20回	鎮守の森は原始の照葉樹林の生き残りか？	2007年9月21日	小森純一 (京都精華大学教授) 湯本貴和 (地球研教授)
第21回	京都の世界遺産——上賀茂の杜からのメッセージ	2007年10月12日	村松晃男 (賀茂別雷神社権禰直) 秋道智彌 (地球研副所長)
第22回	生きものにとって自然の森だけが大切なのか？——熱帯と温帯の里山	2007年11月9日	阿部健一 (京都大学准教授) 市川昌広 (地球研准教授)
第23回	地域・地球の環境～市民の役割・研究者の責任	2008年2月15日	石田紀郎 (京都学園大学教授) 渡邊紹裕 (地球研教授)
第24回	黄河と華北平原の歴史	2008年3月14日	木下鉄矢 (地球研教授) 福高義宏 (地球研教授)

■ 地球研地域セミナー

日本の地域ごとの環境と文化に関わるさまざまな問題を、地球研の研究スタッフと地域の有識者が会し、地域の人々とともに考え活発に討議を行っています。2005年より新たに開催しました。2008年度は那覇市と大阪市で開催する予定です。

回数	タイトル・出演者 (日時・場所)
第1回	雪と人——くらしをささえる日本海 (2005年9月17日 富山県富山市) 中井精一 (富山大学助教授) / 張 勁 (富山大学助教授) / 佐藤 卓 (富山県立上市高等学校教諭) / 地球研より 秋道智彌、内山純蔵、佐藤洋一郎、早坂忠裕
第2回	火山と水と食：鹿児島を語る！ (2006年9月18日 鹿児島県鹿児島市) 平田登基男 (鹿児島工業高等専門学校教授) / 浜本奈鼓 (NPO法人くすの木自然館専務理事) / 川野和昭 (黎明館学芸課長) / 地球研より 秋道智彌、佐藤洋一郎、中野孝教
第3回	伊豆の花と海。——伊東から考える地球環境—— (2007年9月15日 静岡県伊東市) 佐野藤右衛門 ((財)日本さくらの会副会長) / 川勝平太 (静岡文化芸術大学長) / 西垣 克 (静岡県立大学長) / 地球研より 秋道智彌、佐藤洋一郎、湯本貴和



● 研究プロジェクト発表会

すべての研究プロジェクトの進捗内容について、プロジェクトリーダーが発表を行い、地球研の研究教育所員のみならず事務職員や外部の共同研究者の前で質疑応答を受けます。3日にわたる研究発表会にはのべ500名以上が参加します。こうした全所的な取り組みと活発な意見交換は地球研における自己点検評価につながる重要な研究活動となっています。2008年度は12月に開催を予定しています。

● その他の研究会

地球研では、研究プロジェクト発表会のほか次のような研究会を開催し、地球研の目指す「地球環境学」の構築へ向けて幅広く議論を行っています。

■ 地球研セミナー

国内・海外の研究機関で地球環境関連の研究を行っている精鋭の研究者を講師として招へいし、地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有することにより、広い視座から地球環境学を捉えようとするセミナーです。

2007年度は5回のセミナーが開催され、自然資源と生業、植生と水環境、人間と動物、サステナビリティ、学際研究といった幅広いテーマが扱われました。

本セミナーはほぼ隔月に行われます。所外にも開かれており、所員だけではなく関連分野の研究者も多数参加しています。

■ 談話会セミナー

談話会セミナーはお昼ごはんを食べながら行う研究会です。地球研では、多様な研究分野に対する相互の理解とともに、地球環境問題という共通テーマに沿った不断の議論を重ねることが求められています。談話会セミナーは、講演者各自の研究バックグラウンドを踏まえつつ、多くの所員にとっての共通の話題を提供し、研究者相互の理解と交流を深めることを目的としてほぼ隔週で開催されています。

● 出版物、ニュースレター

■ 地球研叢書

地球研の研究成果を一般に分かりやすい形で紹介する出版物で、これまで『生物多様性はなぜ大切か?』、『中国の環境政策——生態移民』、『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか?』、『森はだれのものか?』(いずれも昭和堂)を刊行しています。

2007年度には『黄河断流——中国巨大河川をめぐる水と環境問題』、『食卓から地球環境がみえる』、『地球の処方箋——環境問題の根源に迫る』、『地球温暖化と農業』(いずれも昭和堂)の4冊を刊行しました。



『黄河断流』 福島義宏著 流域の降水量や灌漑農地の取水量、各地の流量の変動の実測値や推量値など、「黄河」プロジェクトの成果をもとに、歴史にも触れつつ、黄河が抱える「問題」を解き明かしていく

『食卓から地球環境がみえる』 湯本貴和編 2007年度の地球研フォーラム「地球環境問題としての『食』」の成果。身近な「食べる」ということから地球環境問題を考える

『地球の処方箋——環境問題の根源に迫る』 総合地球環境学研究所編 地球研の研究者たちが日本や世界各地のフィールドで自分の足で歩き集めたデータをもとに、フィールドで得た直感を大事にしながら、思索を経て得られた地球環境と人間文化のかかわりのダイナミズム、そこから導き出された未来への展望を語る。地球研での取り組みを網羅的に紹介する

■ 地球研ライブラリー

地球研所員による研究活動を広く紹介する学術出版物で、これまで『クスノキと日本人—知られざる古代巨樹信仰』（八坂書房）、『世界遺産をシカが喰う』（文一総合出版）、『ヒマラヤと地球温暖化』（昭和堂）、“Indus Civilization-Text and Content” (Manohar)、『人はなぜ花を愛でるのか』（八坂書房）を刊行しています。

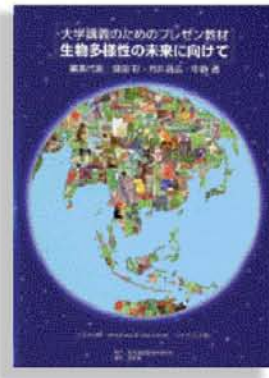
■ 地球研ニュース “Humanity & Nature Newsletter”

地球研とは何か、どのような活動を行っているのかなどの最新情報を、研究者コミュニティや社会に向けて発信するもので、2006年に創刊。隔月発行で年6回を予定。A4版でオール・カラーの読みやすい内容となっています。



■ その他の出版物

2007年度に終了した研究プロジェクトの成果物として、次の出版物を刊行しました。



『黄河の水環境問題—黄河断流を読み解く』福嘉義宏・谷口真人編 「黄河断流」と渤海の環境変化を詳述した乾燥地に関心のある人に向けた専門書
『人と魚の自然誌』秋道智彌・黒倉寿彌 ヌコン河集水域における魚と人間の交渉史を、中国、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの事例を元に検証した論集で東大、東海大との連携研究の成果
『生態と歴史—人類学的視角』主編 秋道智彌(日)・尹紹寧(中)、副主編 張海超・朱映占 中国・雲南大学の研究者を中心に、雲南省の少数民族における生態史的な論考を19編収録したもので、生態史プロジェクトの成果となる中国初の生態史研究
『大学講義のためのプレゼン教材 生物多様性の未来に向けて』編集代表 畑田彩市川昌広・中静 透 大学の一般教養科目の受講者を主な対象としたプレゼンテーション教材。生態学、民俗学、社会学、経済学などさまざまな視点から生物多様性について分かりやすく紹介
『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第1巻 生業の生態史』河野泰之 責任編集、秋道智彌 監修 モンスーンアジアの主要な生業である水田・焼畑稲作、狩猟、水草利用、漁撈、家畜飼育、食文化などの分析から本地域における生業生態の変容過程を明らかにした
『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第2巻 地域の生態史』ダニエル・クリスチャン 責任編集、秋道智彌 監修 モンスーンアジアにおける地域の生態史を、民族移動、緑の革命の意義、流通と交換、土地利用の変遷、碑文にみる村落史、ケシ栽培などの分析から描いた
『論集モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第3巻 暮らしと身体』秋道智彌 責任編集・監修 モンスーンアジアにおける暮らしと身体に起こった変化を、人口・健康・栄養転換、食と衣、民族移動、辺境史、資源管理について実証した